Meiji Repository
明治大学学術成果リポジトリ / MEIJI UNIVERSITY Academic Repository

Title	宇治八の宮論-過去・音楽・菟道稚郎子を中心として-
Author(s)	太田,陽介
Citation	文学研究論集, 26: (235)-(243)
URL	http://hdl.handle.net/10291/7374
Rights	
Issue Date	2007-02-28
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/

Meiji University

文学研究論集第26号 '07・2
論文受付日　二〇〇六年十月三日　掲載決定日　二〇〇六年十一月十五日

宇治八の宮論
――過去・音楽・菟道稚郎子を中心として――

A study of Uji Hachinomiya

博士後期課程　日本文学専攻　二〇〇五年度入学
太田陽介
OTA Yosuke

【論文要旨】

八の宮は宇治十帖の冒頭・橋姫巻ではじめて登場した人物であり、そこではこれまで語られることのなかった彼の半生が明かされた。彼は政治的に翻弄された後、自邸の火災を契機として宇治へ移住する。この火災に政治的陰謀を読み取る論もあるが、物語状況に鑑みてその可能性は低いと考えた。

また八の宮には特筆される才能として楽才があるが、彼が物語中で琴（きん）の琴を演奏するのは一場面である。琴が〈王者性を象徴する楽器〉であるとの指摘はこれまでもたびたび論究され、宇治十帖ではそうした性格が希薄になるという指摘もある。しかし八の宮が琴を演奏しないのは、琴がいまだそのような性格を帯びているためであり、八の宮にとっての琴あるいは楽才は、誇りであると同時に過去を呼び覚ます象徴であり、それゆえ八の宮は弾琴を拒否したのであった。

最後に、八の宮と菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の関係について考察した。橋姫巻で明かされたところによれば、八の宮は冷泉――光源氏体勢へ異議申し立てを行ったいわば〈反逆者〉であるが、そうした姿は浮かび上がってこないように思われる。これは語り手の「語り方」に起因しており、また菟道稚郎子が重ねられているためであると結論づけた。

【キーワード】　八の宮、音楽、琴、菟道稚郎子、語り

はじめに

『源氏物語』橋姫巻は「世に数まへられたまはぬ古宮」（⑤一一七頁）八の宮の登場によって開巻する。八の宮は桐壺院の第八皇子で、朱雀院や光源氏の弟、冷泉院の兄にあたる人物である。橋姫巻の冒頭ではこの古宮の過去が語られるが、はじめに、そこで明らかにされた事実を抜粋しておくと次のようになる。

①桐壺院の第八皇子で、母は女御（大臣の女）である
②北の方は「昔の大臣」の娘。八の宮との間に大君・中の君を設けるが、中の君産後に死亡
③「世の中に住みつく御心おきて」はないが、音楽の才能はあり
④弘徽殿大后によって立坊を画策されたが、実現せず、零落した生

活を送る

⑤住んでいた「さすがに広く、おもしろき宮」が火災に遭い、宇治へ移住する

八の宮の経歴については神野藤昭夫氏による、橋姫巻以前の物語世界との照合をはじめとする詳細な検討があり[1]、本稿も氏の指摘に拠ったところが大きい。そこで本稿では、橋姫巻以前の物語世界をも見据えつつ、巻冒頭で明らかにされた八の宮の半生、八の宮と音楽、また橋姫巻冒頭の語りと『花鳥余情』等の指摘する菟道稚郎子（うぢのわきいらつこ）との関係、以上三点についての私見を述べることとする。なお『源氏物語』引用は、新編日本古典文学全集本に拠り、巻数・頁数を付した。

1　八の宮の半生

八の宮は、父院・母女御に若くして先立たれ、有力な後見といえば北の方の出身家である「昔の大臣家」しか存在しなかった。しかし、この「昔の大臣家」もそれほどの威勢を持っておらず、八の宮は心許ない生活を送っていたらしい。物語における主だった大臣家といえば、代々、太政大臣を襲位した左大臣家と、朱雀院の外戚である右大臣家、そして鬚黒大臣家が存在した。しかし、北の方の大臣家は「昔の大臣家」なのであり、これら以外の大臣家であるということになる。また、八の宮の母女御の家も大臣家であったようだが、この家も桐壺巻以前の大臣家であろう。もちろん母方・北の方いずれの大臣家とも、前述の左・右大臣家となんらかの関係があった可能性も考えられるが、これについての検討は、本稿では措くことにする。

これらの点から、八の宮と北の方の結婚は政治的な意味合いを持ち、その意図するところは双方の家の再興にあったと考えられる。

そして、橋姫巻ではこれまでの物語内で語られなかった新事実が明かされるのである。それは

朱雀院の大后の横さまに思しかまへて、この宮を世の中に立ち継ぎたまふべく、わが御時、もてかしづきたてまつりたまひける騒ぎに…（⑤一二五頁）

と語られる、東宮＝冷泉廃太子の陰謀である。これにより、橋姫巻冒頭で語られた「時移りて…」（⑤一一七頁）の指すものが具体化して示されたのである。

「朱雀院の大后」とは、いうまでもなく朱雀院の母である弘徽殿大后である。弘徽殿大后の家である右大臣家は、冷泉の即位によって権勢が光源氏家に移ることを恐れていた。冷泉立坊は桐壺院の遺志によるものだが、冷泉の後見は光源氏であり、その源氏を須磨へ退去させることで冷泉の立場を危うくし、その機に乗じ、右大臣家では冷泉の廃太子を計画し、かわって八の宮を擁立しようと画策したのである。

また、弘徽殿方が八の宮擁立を画策した理由としては、この時までに朱雀院に男子が誕生しなかったことも大きい。しかしたとえこの結果、八の宮が東宮となったとしても、朱雀院に男子が誕生した場合、八の宮は廃太子となる可能性が高い。

そして結局は冷泉の即位によって八の宮擁立の計画が潰えたあと、八の宮は冷泉―光源氏方との交際もなく、「世に数まへられたまはぬ古宮」として、また俗聖としての生活を送るのである。

振り返ると、正篇、特に藤裏葉巻までは、物語は光源氏の王権回復を一大テーマとし、またそれに付随する栄華を語ってきたのであった。しかし光源氏の栄華に圧倒され、周縁へと弾き飛ばされた人物がいたはずである。そうした人物の一人が八の宮であった。だが物語は、あえてそこに焦点を当てるようなことはしなかった。その意味で八の宮はこれまでの物語の陰画に位置した人物であり、正篇でその存在が明かされることはなかったが、橋姫巻に至ってこのような紹介をされることは、光源氏の栄華そのものを、あるいは栄華を語るという物語の「語り」そのものを、改めて問い直す恰好となっているのではないか。このことはまた後にも述べる。

結果として、廃太子計画は未遂に終わった。八の宮は北の方との間に二人の姫君を設けているが、妹君、すなわち中の君の出産後、北の方は他界する。これは、時勢に乗れず、北の方との「深き御契りの二つなきばかり」(⑤一一七頁)を支えとしていた宮にとっては、まさに痛恨の一事であったといえよう。そして伝来の宝物、「祖父大臣」の遺産のほか、めぼしい生活の手段や処世術を持たなかった八の宮にとって、生活を確保するためには再婚がもっとも現実的な手段であるが、八の宮はそれを拒否したのだった。これはつまり生活の保障がないということであるが、八の宮自身にもそのような生活を望んでいた節があったかとも思われる。いずれにしろ、八の宮は零落の道を辿ることになる。

さらに不幸は続き、八の宮邸は火災に遭遇する。ここで、この火災について少し考えてみたい。

吉海直人氏の調査によれば、物語文学の中に火災の記述が現れることは少ないとされるが、『源氏物語』には京中での火災が二件描かれている。[2] そのうちの一件がこの八の宮邸の火災であり、もう一件は椎本巻での三条の宮の火災である。火災の原因には落雷や放火などが考えられるが、八の宮邸火災、三条の宮火災のいずれとも、その原因までは言及されていない。

この火災は八の宮が宇治に移る契機であり、またこれにより物語の舞台に宇治が浮上するが、一方でこの火災は八の宮の財力の乏しさを端的に示してもいよう。というのは、三条の宮は火災後、薫によって一年後に再建されているからである。

八の宮邸の火災の原因は何であったか。吉井美弥子氏はこの火災の背後に「都から八の宮を排除しようとする徹底的なまでの政治的陰謀の影」[3]の存在を指摘する。火災に政治的陰謀が関わることは前掲吉海論でも指摘されているが、ここでは平安時代の火災の一例として、慶滋保胤「池庭記」(『本朝文粋』巻十二 375)を確認してみる。

…往年一つの東閣有り。華堂朱戸、竹樹泉石、誠にこれ象外の勝地なり。主人事有りて左転せられ、屋舎火有りて自づから焼けぬ。その門客の近地に居る者数十家、相率ゐて去りぬ。その後主人帰るといへども、重ねて修はず。子孫多しといへども、永く住まはず。荊棘門を鎖し、狐狸穴に安んず。それかくの如きは、天の西京を亡ぼすなり、人の罪に非ざること明らかなり。…[4]

「池庭記」には西の京の荒廃が記されており、ここでいう「主人」とは西宮左大臣＝源高明である。その高明が「事有りて左転」、つまり大宰権帥に左遷された安和の変の後に高明邸が火災に遭ったことを、「池庭

記」は伝えている。『日本紀略』から、安和の変と火災の日時を探ってみよう。

（安和二年）（三月）廿五日壬寅。以二左大臣兼左近衛大将源高明一。為二大宰員外帥一（以下略）

（同）四月一日戊申。（中略）午刻。員外帥（高明）西宮家焼亡。所レ残雑舎両三也。[5]

『日本紀略』に拠れば、高明邸の火災は高明が「大宰員外帥」となってからわずか六日後に起きている。ここに政治的陰謀を読み取っても良いだろう。「池庭記」は高明邸の火災を含めて、西の京の荒廃を「天の西京を亡」した結果としているが、安和の変との因果関係を考えるならば、ここに陰謀が垣間見えてくるのではないか。

物語に戻ると、この火災は八の宮一家のその後の生き方を決定付けたといえる。しかし、火災の背後に政治的陰謀を読み取った場合に問題となるのは、いったい誰が八の宮邸に火を放ったのか、ということである。本居宣長『玉の小櫛』は、この火災が起こり、八の宮一家が宇治へ移った時期を「雲隠巻のほどにやあたるべからむ」[6]としている。東宮立坊の望みが絶たれた後の八の宮の生活は、祖父大臣の財産も失せて、わずかに調度類のみを残して暮らすという落魄ぶりであった。このような状態の八の宮を政治的に、また「徹底的」（吉井氏）に排除する必要が本当にあったのだろうか。物語状況と照合した場合、そこに陰謀を見出すのは現実味を帯びてこない。八の宮邸火災の原因は人為的なものか、あるいは天変かは不明であるが、そこに政治的意図を読み取るのはやや深読みに過ぎるのではないか。

ともあれ、この火災により京に住むべき地を失った八の宮一家は宇治へと移り住むのだった。

2　八の宮と音楽

八の宮が零落した生活を送っていたことは既に見てきたとおりだが、宮には特筆すべき才が一つあった。それは音楽であった。ここでは八の宮と音楽について考察する。

八の宮は楽才に秀でており、俗聖としての生活の中にも「経を片手に持たまうて、かつ読みつつ唱歌もしたまふ」（⑤一二四頁）様子が語られていた。

絵合巻で、蛍の宮は桐壺院の皇子たちについて次のように語った。

…院の御前にて、親王たち、内親王、いづれかはさまとりどりの才ならはさせたまはざりけむ。…（②三九〇頁）

蛍の宮の語るところによれば、桐壺院の皇子たちはみな、院の方針によって「文才」をはじめ、楽などの芸術の才を身につけた。そして楽については光源氏が一番の上手であったという。光源氏は桐壺院から楽を習ったとされるが、八の宮の場合はそうではなく、物語にも登場する「雅楽寮の物の師」（⑤一二四頁）などの人々からその多くを学んだものと考えたい。

八の宮はのちに源氏の笛の音や頭中将の舞を回想する。そして薫の吹く笛の音を「致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」（椎本　⑤一七一頁）と聴き、八の宮の音楽の才能は薫の暗部にも関わってくるのだった。

琴の名手とされる八の宮だが、物語で八の宮が琴の琴を演奏している場面は一箇所しか存在しない。またその場面では、八の宮は薫により弾琴を促されているが、それを逡巡するような態度を見せるのである。以下、八の宮が弾琴する場面を中心に、なぜ宮はそれを躊躇するのか、考察してみる。

まず場面を引用する。

明け方近くなりぬらんと思ふほどに、ありししのめ思ひ出でられて、琴の音のあはれなることのついでつくり出でて、「①前のたび霧にまどはされはべりし曙に、いとめづらしき物の音、一声うけたまはりし残りなん、なかなかにいといぶかしう、飽かず思うたまへらるる」など聞こえたまふ。「色をも香をも思ひ棄ててし後、昔聞きしこともみな忘れてなん」とのたまへど、人召して琴とりよせて、「いとつきなくなりにたりや。②しるべする物の音につけてなん、思ひ出でらるべかりける」とて、琵琶召して、客人にそそのかしたまふ。取りて調べたまふ。「さらに、ほのかに聞きはべりし同じものとも、思うたまへられざりけり。③御琴の響きからにやとこそ思うたまへしか」とて、心とけても掻きたてたまはず。「いで、あなさがなや。しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかここまでは伝はり来ん。あるまじき御事なり」とて、琴掻き鳴らしたまへる、④いとあはれに心すごし。かたへは、峰の松風のもてはやすなるべし。⑤いとたどたどしげにおぼめきたまひて、心ばへある手ひとつばかりにてやめたまひつ。（⑤一五六―一五七頁）

簡単に場面を確認しながら考えてゆく。薫は八の宮に琴を弾くように依頼するが（傍線①）、宮は薫が琵琶を弾くならばそれに合わせて弾こうという（傍線②）。それに従い、薫は八の宮から琵琶を受け取るが、「以前聞いた音色とは全然違う。あのときは琴の響きが良いせいかとも思いましたが」（傍線③）という。

まずはここに注目してみたい。傍線③の「御琴の響きからにや」について、上原作和氏は次のように言う。

かつて〈琴〉そのものが「王権」や「罪」を〈換喩〉していたほどの〈中心〉たりえないことが〈御琴の響きからにや〉の薫の心内語にも端的に示されている。[7]

続編における琴の位相が正篇のそれと異なることは抑えておくべきであるが、しかしその一方で、琴が王権という主題を引き寄せるほどの求心力は持たないものの、ある点では正篇のそれを引き継いでいるとも思われる。

このやりとりのあと、八の宮はおもむろに琴の琴を手に取り、演奏するが、その音色は「たどたどしげにおぼめ」いており、どことなくおぼろげで、それが名手の演奏であるとは必ずしも言い難いようであり（傍線⑤）、語り手により「いとあはれに心すごし」（傍線④）と評されている。繰り返すが、八の宮が琴を弾く場面は物語中にここのみで、そのために八の宮の琴の腕前が実際はいかほどのものであったのか、確認する術はない。だが逆に考えれば、〈弾琴を拒否する八の宮〉の姿が、物語には見られるのではなかろうか。

物語にはこの場面のほか、もう一箇所、八の宮が楽器を演奏する場面がある。それは椎本巻、薫や匂宮はじめ、当代の貴公子たちが八の宮邸

を訪れた場面である。彼らは「かかるついでに」と、八の宮に弾琴を催促するが、宮はそれを聞き入れず、「心にも入れず」に箏の琴を奏でるのであった（椎本　⑤一七三頁）。

結論に至る前に、『源氏物語』における琴がどのように把握されてきたかを確認しておく。琴の琴は、礼楽思想や「君子左琴」という思想を背景に持つ楽器であり、高橋亨氏は、「〈琴〉は光源氏の王者性、潜在王権を象徴する楽器と見られている[8]」と、その当時までの研究を総括する。また上原作和氏も一連の論考[9]の中で、琴が「王者の宝器」であることを強調している。上原氏の論を端的に示せば次のようになろう。つまり、正篇における琴は、〈王権〉を軸として、その音色を変奏しつつ、「周縁から中心」へと移行していく楽器であった[10]。だが続編での琴は「正篇のそれではありえ」ず、「〈琴〉もまた、他と同様に正篇の世界の価値観が相対化されている[11]」と説いたのだった。

これに対し吉井美弥子氏は

『琴の琴』が『王権』と結びついていた源氏物語正篇の〈楽〉の問題は、宇治十帖に入っても、少なくとも八の宮に限っては、いまだに残響していると捉えられるのである[12]

と結論づける論を発表し、上原論に修正を迫った。

これらをふまえて、以下に筆者の見解を述べる。上原氏の指摘のとおり、続編における琴の他楽器との差異は確かに希薄であり、それが〈王者性の証し〉とまでは言えない状況にあるが、結論としては吉井氏の論を支持し、こと八の宮と琴に関していえば、やはり正篇の問題を継承していると思われる。八の宮はかつて東宮候補にも推された、れっきとした親王であった。そうした彼の高貴さを象徴するものが、楽才であり、琴であった。そしてまた、橋姫巻冒頭で語られたように、財産・邸・北の方と、「あらゆるものを失い続け[13]」た八の宮にとって、琴とは、皇統につらなる者としての誇りであると同時に、世上に翻弄された過去の象徴でもあったのだ。そして八の宮が琴を弾かないことにより、正篇で琴の持っていた王者性が、逆説的に表出されるのである。つまり琴は八の宮の過去を呼び覚ます楽器として存在し、宮が琴を弾かないのは〈仏心〉という単純な理由からだけではなく、宮の持つ暗い過去を重ね合わせることによってはじめて見えてくるのである。そのような八の宮が奏でる琴の音色は、自らの過去を照らした憂愁の響きなのである。

3　橋姫巻冒頭の語りと菟道稚郎子

最後に、八の宮のモデルとして挙げられる菟道稚郎子（うちのわきいらつこ）と、橋姫巻冒頭の語りについて考察することにしたい。八の宮のモデルに応神天皇の子・菟道稚郎子（『日本書紀』による。以下同）を指摘したのは『花鳥余情』であった。『花鳥余情』は次のように注する。

むかしのうちわか子はこのかみに位をゆつりてうちにこもり給へりこの八宮は御おとうとにとう宮をこされてうちにかくれ侍り　ことことなるやうなれとそのほいをとけすして世をうち山に名をのかれ侍る　そのあとあひにたるうへともに兄弟のあひたの事なれはかた〳〵に宇治の巻とは申つたへ侍るなり[14]

『日本書紀』によれば、菟道稚郎子は父・応神天皇によって「太子（ひつぎのみこ）」とされながらも、父の死後に即位せず、みずから命を絶ち、大鷦鷯尊（おほさざきのみこと）

に皇位を譲ったとされる。この八の宮と菟道稚郎子には相違点も多く存在し、この点、両者の〈宇治〉との関わりに目を向けるべきであろう。

この『花鳥余情』説に対して異論を唱えたのは本居宣長であった。宣長は『玉の小櫛』の中で、八の宮を「惟喬親王に准據して書るなるへし」「薫君のとぶらひ参り給へるも、業平ノ朝臣のおもかげあり」と、『伊勢物語』に引きつけた惟喬親王准據説を主張し、菟道稚郎子説を「さらによしなし」[15]として斥けた。宣長の指摘は断片的であって、『玉の小櫛』でも深く言及はされていないものの、『伊勢物語』を媒介とすることで、大君・中の君姉妹を初段の「女はらから」に比すことができ、この読み方は薫の物語を解釈する上での重要な方法であろう。

このほか、八の宮のモデルは諸氏によって指摘されており[16]、諸説についての検討も重要なことではあるが、ここでは菟道稚郎子と八の宮の関係について考察してみたい。

高橋亨氏は八の宮・菟道稚郎子・惟喬親王の共通要素として「王権喪失と異郷的空間」を抽出した[17]。八の宮論の軸としては氏の指摘から大きくブレることはないと思うが、氏はまた八の宮に「落魄の反逆者」（傍点引用者）としての姿を見ており、菟道稚郎子に反逆した大山守命（おおやまもりのみこと）をも考慮に入れるべきだと言う。確かに、八の宮は冷泉＝源氏体制への反逆者―実際には弘徽殿方の傀儡であっただろうが―として捉えられるが、やはり〈宇治〉と〈菟道〉の関係を重視するならば、大山守命を重ねることには慎重になるべきではないか[18]。

八の宮を反逆者と見ることについては、廃太子未遂事件が物語の時間に即して語られておらず、したがって八の宮自身の立坊の意志は不明であり、彼を弘徽殿大后らと同じ〈反逆者〉と読んでしまうことは躊躇される。また八の宮を〈反逆者〉として糾弾するのであれば、この廃太子未遂事件に関わった人々が反逆した対象は誰であるのか、この点を明確にせねばなるまい。「父の遺志」という見地に立てば、応神の遺志通りに即位しなかった菟道稚郎子も父への反逆者であり、冷泉を東宮に、という「父の遺志」に背いた八の宮も父への反逆者であると解されるからである。このことから、八の宮を単純に〈反逆者〉と見ることは難しいと思われる。

非常に私的な印象ではあるが、橋姫巻からは反逆者としての八の宮像は読み取り難いように思う。これは、事件に関する八の宮の心中が直接的に語られないことも原因していようが、一方で、語り手の〈語り方〉も関係しているのではないかと思われる。

結論から述べると、橋姫巻の語りは「反逆者としての八の宮像を韜晦する語り」の構造になっているのではなかろうか。東宮冷泉を廃そうとする具体的な思惑があったことは、時間的に考えるならば橋姫巻の冒頭で語られるべきことではなかったか。

とりたてた後見もいない、家具ばかり残った邸宅での暮らしと火災の記述に挟まれ、「源氏の大殿の御弟、八の宮とぞ聞こえしを、…」（⑤一二五頁）と、廃太子未遂の事実は唐突に語られる。三田村雅子氏はこうした語りについて

一方的被害者に近い八宮をこのように語ることで、宇治十帖は読者に、今度は八宮の立場に寄り添って、これまで語られてきた物語をもう一度捉え返すことを求めているのである[19]。

と指摘している。つまり政変の意図が後になって明かされているのは、光源氏の栄華の外へと追いやられた八の宮に語り手が肩入れしているためであり、そして橋姫巻以後の物語がこれまで触れてこなかった箇所に光を当てようとしているためであろう。そしてまた宇治という地が、菟道稚郎子の〈悲劇〉のイメージを喚起し、それにより反逆者としての八の宮像が隠されるのではないだろうか。

『日本書紀』の菟道稚郎子説話をどのように位置づけるかは難しい問題ではある。だが、筆者としては、実際の皇位継承は『日本書紀』に記されるような美談めいたものではなく、応神から仁徳へと皇位継承される間に兄弟間の争いがあったと想定し、大鷦鷯尊が菟道稚郎子を打倒したのだと考える。このような事情で菟道稚郎子は皇位に即かなかったと考えられるのだが、その理由を『日本書紀』では「自殺」(『古事記』では夭折)と改変しているのであろう。[20] この改変の意図は仁徳天皇像と関わってくるものであろうが、このような改変が結果として菟道稚郎子に悲劇性を付加したのだと考えられる。

また、『日本書紀』や『花鳥余情』の引く菟道稚郎子説話を見ると、自殺することによって菟道稚郎子は皇位から自ら退いた、というニュアンスが読み取られる。また『日本書紀』には菟道稚郎子が典籍に通じたことが記されているが、それは菟道稚郎子を美化すると同時に、大鷦鷯尊への皇位移譲のためのレトリックに生かされていると見るべきであろう。

これらをふまえると、どのような八の宮像を見ることができるだろうか。八の宮もまた、来るべき冷泉—光源氏体制への異議申し立てに加わった人物であったことが語られた。だが、結局クーデターは未遂に終わり、また八の宮が宇治へと移ることで、その背景に菟道稚郎子のイメージが生成され、八の宮の反逆者としての姿は、菟道稚郎子の姿を重ね合わせることで巧妙に隠されたのである。また喜撰の歌

わがいほは宮このたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

(『古今集』巻一八　983)

に詠まれる〈憂し〉=〈宇治〉とする響きも、八の宮の悲劇性を演出しているのだといえよう。

八の宮をめぐって、橋姫巻ではさまざまな新事実が語られてきた。これまで物語を読み進めてきた読者は、これに違和感を覚えるのも無理はないだろう。物語がここで新事実を明かしたのは、歴史叙述の方法とも関係しているように思われる。

なおこの考察では『源氏物語』の解釈に『日本書紀』を用いた。だがこうした方法について、神野志隆光氏は〈日本書紀〉受容の実態に即した解釈をするべきであるという。[21] つまり、平安期には『日本書紀』そのものが受容されていたのではなく、『日本書紀』を再構築した書—氏はこれらを〈平安期日本紀〉と称している—によって受容されていたことを考慮に入れ、物語をいちど日本紀言説の中に置いて論じなくてはならない、ということである。本稿で取り上げた菟道稚郎子と大鷦鷯尊の皇位相譲譚については『日本紀竟宴和歌』には見いだせたものの、私記には見いだせなかった。また『花鳥余情』が提示した菟道稚郎子説話も厳密な出典は不明であった。その点、本考察は現時点での筆者の読みの範疇を出られない。菟道稚郎子についての〈日本紀言説〉を見いだすこと

によって、物語自体、あるいは注釈書の読みの、より受容に根ざした解釈が発生するであろう。〈日本紀〉のみならず、依拠する資料の受容実態を考えることは、引用等を考察する場合にも、意識的になることが必要であろうと思う。

最後になったが、八の宮を語る上で欠かせないのは「俗聖」としての姿である。本稿ではこの点について特に触れることはなかったが、八の宮にとっての仏道とは、「救済」という単純な言葉で済まされるような性質のものではないように思われる。本稿で考察してきた八の宮の過去が、「俗聖」としてのあり方にいかに作用しているか、この問題については橋姫巻以降の物語を含めた上で、稿を改めて論じることにしたい。

注

(1) 「宇治八の宮論　―原点としての過去を探る―」(伊井春樹ほか編『源氏物語と古代世界』新典社　一九九七年)

(2) 「『火事』と平安朝文学」(『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』おうふう　二〇〇三年)

(3) 「蕨と〈女三の宮〉―源氏物語第三部の一断面―」(『国文学研究』第百集　一九九〇年三月)

(4) 引用および訓読は新日本古典文学大系本に拠った。

(5) 引用は『新訂増補　国史大系』に拠った。

(6) 『本居宣長全集』第四巻(筑摩書房　一九六九年)　二六九頁

(7) 「〈琴〉のゆくへ(3)―楽統継承譚あるいは宇治十帖の精神史的基層―」(『光源氏物語の思想史的変貌―〈琴〉のゆくへ』有精堂　一九九四年)

(8) 「源氏物語の〈琴〉の音　知の歴史語りの遠近法」(『季刊 iichiko』23　一九九二年四月)

(9) 注(7)前掲書所収の一連の論考。

(10) 「琴のゆくへ(2)―楽統継承譚の方法あるいは光源氏物語の思想史的位相―」(注(7)前掲書)

(11) 注(7)前掲論文

(12) 「宇治八の宮の『琴の琴』―響かぬ音色―」(『日本文学』43巻7号　一九九四年七月)傍点は引用者による。

(13) 吉井氏注(9)前掲論。

(14) 中野幸一編『花鳥余情』(源氏物語古注釈叢刊　第二巻　武蔵野書院　一九七八年)

(15) 注(6)前掲書　四七七頁

(16) たとえば関根賢司「源氏物語と日本紀」(『物語文学論―源氏物語前後―』桜楓社　一九八〇年)は宇治王のイメージを指摘、また土方洋一「宇治の物語の始動―第二部から第三部へ―」(『源氏物語のテクスト生成論』笠間書院　二〇〇〇年)は宇治に別業を営んだ源融を指摘する。

(17) 「宇治物語時空論」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会　一九八二年

(18) 阿部好臣「王権を背くもの―宇治十帖冒頭の位置づけ―」(『日本文学』33巻5号　一九八四年)もこの点を強調する。

(19) 『源氏物語　物語空間を読む』ちくま新書　一九九七年

(20) このあたりについては神田秀夫「仁徳グループと継体グループ」(『古事記の構造』明治書院　一九五九年)、住野勉一「太子菟道稚郎子のことども」(横田健一編『日本書紀研究』第二十冊　塙書房　一九九六年)、三浦佑之「聖帝への道―大雀から仁徳へ」(『神話と歴史叙述』若草書房　一九九八年)などを参考にした。なお、兄弟間の皇位継承争いの背景については神田論、住野論の他、吉井巌「応神天皇の周辺」(『天皇の系譜と神話』塙書房　一九六七年)にも詳述される。

(21) 「『日本紀』と『源氏物語』」(『国語と国文学』75巻11号　一九九九年十一月)ほか、吉森佳奈子「『河海抄』の日本紀」、「『源氏物語』と日本紀」(『『河海抄』の『源氏物語』』和泉書院　二〇〇三年)も同趣の提言をする。